日本語の畳語—名詞の畳語が表現する意味の可能性—

清　海　節　子

1. はじめに

現代日本語の畳語の中で,「人々」「山々」「国々」など名詞を語基にした畳語を取り上げ，その意味について検討する。畳語は，どのような意味を表現するために用いられているのだろうかという疑問に対して，先行研究を参考に畳語の中核的な意味を見つけ出すことが本論の目的である。畳語は，語基全体または部分が繰り返され，重複語とも呼ばれる。本稿では 繰り返される部分に意味があり，単独で自立して用いられるものに限定し，意味のない要素が反復されている擬音語・擬態語は考慮に入れない。

日本語では，いろいろな場面で 同じ名詞が繰り返されることがよくある。以下は，2020 年３月から４月上旬にかけてテレビ番組の中で観察された実例である。最初の 3 例は「…で」という表現で副詞句になっている。以下，下線の部分が名詞の繰り返しである。

(1) (i)　亡くなった人の親族が 葬式についての発話：
「身内身内で行う…」
（他人を入れず 身内のみで葬式を行うことを表していると思われる。）
・「身内」の意味を強調しているか，または，複数の「身内」を表す。

(ii) 某区保健所の担当者がコロナウイルスの感染の可能性についての発話：
「水面下で ひとひとで移しているのではないか…」
（「個別に人から人」の意味で用いられている。）
・「個別」の人から別の人　（二人を指す？）

(iii) 東京都の飲食店等の休業要請決定前の経済専門家の発話：
「…難しいんですけど 個別個別で判断すれば難しくないですよ」
（個別とは個別の業種を指すので,「業種ごと」という意味であると思われる。）
・繰り返しで「…ごと」（枚挙）の意味を表すために用いられている。

(iv) 客が減って困っている状況について飲食店経営者店の発話：
「自粛自粛だけで….」
（「自粛ばかり要求されて（損失を被ること）」を表現している。）
・「自粛」を繰り返すことで，意味が強調されている。

以上から分かるように 名詞の繰り返しはしばしば口語で用いられている。しかも意味は 上の例からだけでも ,「強調 」「複数 」「…から…」「…ごと」のように一つではない。「強調」を表す場合は，独立した語が並列しているとみなされ，畳語ではなく，統語的に繰り返された反復語と考えられる。しかし，(1i) が「複数」を表していると考えれば,「畳語」とみなすことができる。また，(1ii) は「人々（ひとびと）」とは発音が異なるため，単なる複数の意味ではなく,「個別」の意味になるか，不特定の二人を指すことも可能であると感じられる。

日本語に限らず，世界の言語で 畳語（重複語）が観察され，さまざまな意味を表すことができる。英語は日本語ほど畳語が用いられていないが，まったく繰り返しが見つからないわけではない。例えば，‘He is my friend friend.’ (「彼は私の本当の友達だ」) や，‘This room is sma-a-l’ (「この部屋はとても狭い」：語全体でなく，部分的に母音が繰り返されたと考える) などがあげられる。

以下、２節では、畳語の定義と用法について，辞

典などを参考に概観し，名詞の畳語にどのような意味があるか調査する。３節では，現代日本語の名詞の畳語についての先行研究を取り上げ検討する。４節では現代日本語に於ける名詞の畳語の意味を考察する。５節では全体のまとめと結論が述べられる。

2. 畳語の定義と用法

畳語は英語の ‘reduplication’ に相当する。『英語学用語辞典』(1999) では，‘reduplication’ は「重複」と訳されて，「同一の音・音節・語などの反復を言う。英語の papa, mama, tick-tick，など日本語の山々，家々など」と説明されている。筆者が以前提案した言語一般に於ける ‘reduplication’ の定義を以下に示す（Kiyomi 1995:1145）。

(2) “Given a word with a phonological form X then reduplication refers to XX or xX (where x is part of X and x can appear either just before X, just after X, or inside X).
Conditions: (i) XX or xX must be semantically related to X. (ii) XX or xX must be productive.”
訳：X という音韻的形式である単語があるとすると，XX または xX（x が X の一部であり，x がXのすぐ前かXのすぐ後かXの内部に現れる）
条件：(i) XX または xX は，意味的に X に関係していなければならない。
(ii) XX または xX は，生産的でなければならない。

以上のように語基は意味があり，畳語と意味の関連性が認められたものであること，さらに，生産性があるという２つの条件が必要であるとしている。従って，擬音語・擬態語は扱わず，また，化石化した反復語とは，生産的な反復の過程を経て作り出されたもので，現在の用法では，化石化してしまったと考えている。この定義は，非常に単純化されたもので，例えば，意味の関連性が分かりやすいものからそうでないものもあり，まだ，生産性についてもはっきりとしない場合があり，程度の問題と捉えた方が正しいかもしれない。

本節では、畳語の定義と用法について，辞典などを参考に紹介していく。同時に名詞の意味について注目していく。2.1 では一般の辞典を参考にする。2.2 では，言語専門書及び辞典を調べる。2.3 は，日本語学会が編集した３冊の辞典の畳語の項を比較検討する。2.4 では，辞典などで説明された畳語名詞の意味を整理する。

2.1 一般の辞典

『広辞苑 第七版』(2018) は，畳語を「同一の単語または語根を重ねて一語とした語。「我々」「くろぐろ」「峨々」の類」と簡潔な説明で，意味には言及していない。しかし，『小学館精選版日本国語辞典』(2008) は，次のように，畳語が複合語であること，また重複される品詞や意味に言及している。

(3) 同一の単語を重ねて一語とした複合語。体言，動詞の連用形および終止形，形容詞の語幹・連用形・終止形，副詞，感動詞，語根，連語などが重複する。語の意味を強めたり，事物の複数，動作・状態の反復・継続などを示したりする。「人々」「山々」「泣き泣き」「あかあか」「よくよく」「またまた」「おいおい」「ほのぼの」「がらがら」「知らず知らず」の類。

さらに，『日本大百科全書（ニッポニカ）』（近藤 2014）は，次のように『畳語』をより正確に定義している。

(4) 同一の形態素を重ねて用いた形式の複合語。「さらさら」のように全体がそうであるものと，「軽々（かるがる）しい」のように，一部が重ねられているもの（重綴（じゅうてつ））とがある。

また意味はさまざまであるとして上で，つぎの５つの類型に分けている。

(5)(i) 複数：「人人」「木木」「山山」
(ii) 反復：「重ね重ね」「次次」「飛び飛び」
(iii) 強調：「まるまる」「津津浦浦」「見る見る」

(iv) 不定：「だれだれ」「何何」
(v) 擬音・擬態語：「きらきら」「しずしず」「ごろごろ」「やれやれ」

上の意味について，(5v) が幼児語に共通する一種の「強調」を表す一方で，残りの (5i–5iv) は，基本的に「複数」を示すと述べられている。しかしそれでは十分な説明だとは思えない。「複数」と反復との関係性を理解するのは容易ではあるが，「複数」と強調，不定との関連性ついてはどうなのか疑問が生じる。少なくとも，名詞の畳語は「複数」を表すと理解することはできる。

2.2 語学専門書・辞典

2.2.1 『明解言語学辞典』(長屋 2015: 155)

長屋 (2015: 155) は，‘reduplication’ を「重複」と呼び，語の内部構造に関する形態的現象であるとみなす。語基全体の繰り返しの完全重複と，部分的な繰り返しの部分重複がある。言語データ提示の際には，重複には [~] の記号が使われている。完全重複の例は，インドネシア語では，anak「子供」が anak~anak「子供たち」になり，orang「人」が orang~orang「人々」になる。部分重複の例としてタガログ語では gawin「する」が ga~gawin「するだろう」のように，語基の前の部分が繰り返されている。Mangap-Mbula 語では，語基の後ろの部分が反復される：kuk「吠える」→ kuk-uk「吠えている」。

「重複」は語レベルの繰り返しであり，語より大きな単位の繰り返しを「反復」(‘repetition’) と呼んでいる。「反復」は，単語の境界を超えた繰り返しで統語現象であり，「重複」と区別すべきであると長屋は述べている。「反復」の例として，英語の ‘John ran and ran and ran and ran’「ジョンは走りに走った」があげられている。

「重複」の意味に関して，類像的 (‘iconic’) な表現が多いと述べている。即ち，複数性，動作の繰り返し，程度の強調を表す傾向がある。しかし，抽象的・文法的な意味を表すこともあり，例えばタガログ語では次のような用法がある：[未来] bigyan「与える」→ bi~bigyan「与えるだろう」，[弱化] ma-ganda「美しい」→ ma-ganda~ganda「ちょっと美しい」。また，他の接辞が加えられて［偽物］を表すことがある：bahay「家」→ bahaybahay-an「おもちゃの家」。さらに形容詞・副詞形成では義務的に繰り返される：dahan~dahan「ゆっくり」。

長屋の説明には，日本語の例が使われていない。ただ，名詞の畳語については，インドネシア語の例から，「複数」を表すことが分かる。また，語レベルの繰り返しである「重複（畳語）」と統語レベルでの「反復」とを区別をするべきだという点に留意したい。本稿で扱うのは，「畳語」または，「重複語」と呼ばれる形態的現象であり，統語現象の「反復」については論じない。

2.2.2 沖森（他）(2008)

沖森（他）(2008: 69) は，「畳語」の代わりに「重なり語」と言い換えている。その理由は，「畳語」が古代日本語では熟語を意味するので紛らわしいためである。「山々」「神々」を例に挙げ，中国語と違って，単に総数を表すのではなく，個の連続を表すと述べている。また，「重なり語」（畳語）の語構成を，以下のように 3 分類し，それぞれの意味と例をあげている。[1)]

(6) (i) 名詞の畳語：
　a. 複数を表す：「われわれ，ひとびと，木々」
　b. 個として連続をも意味する：「山々，神々」
(ii) 語幹の畳語：
　意味を強める：「にこにこ，高々，軽々，早々」
(iii) 動詞の畳語
　a. 動作の継続（連用形の重なり）：「泣き泣き，思い思い，懲り懲り」
　b. 動作の進行（連体形の重なり）：「みるみる，かえすがえす，ゆくゆく」

また，動詞の連体形の重なりの中には，状態副詞の役割をするものもある。従って，動詞の畳語は，動作の継続や反復だけでなく，心情を表すこともあると述べている。

名詞の畳語にかんしては，沖森（他）によると「複

数」だけでなく，「個としての連続」という意味があると考えている。しかし，これに関して説明がまったくないので，どのような意味で「連続」と言っているのか分からない。山々の場合は，隣り合って存在するということなのであろうが，神々についてはどうなのか疑問が残る。

2.2.3 秋元 (2002)

秋元 (2002: 82) は，語の種類を以下のように整理している。[2] 畳語を複合語から区別している点が特徴的である。

(7)
- 語
  - 単純語 ----- 男，心，わたし，書く，寒い，もし　等
  - 合成語
    - 複合語 ----- 本箱，男心，山登り，飛び出す　等
    - 畳語 ----- 人びと，泣き泣き，時どき　等
    - 派生語 ----- お茶，不器用，男っぽい，高さ，大人ぶる　等

上から分かるように，「男」「心」などの単純語は，それ以上に分けられない一つの語基（語の意味の中核的な要素）からなる語である。それに対して，合成語は，3 種類に分けられ，その内，「本箱」など二つの語基から成立するのが「複合語」で，「人びと」のように同一の語基が結合した語が「畳語」である。また「男っぽい」のような派生語は，語基（「男」）と，語基の意味を強めたり，意味を添えたりする働きをし，単独では用いられない接辞（「っぽい」）から成り立っている。

秋元 (2002: 91-92) は，同一の語基が結合したものを「畳語」と呼んでいる。「しくしく」「ざあざあ」のように語根を重ねる場合も広義で畳語と考えることもあるが，秋元自身は含めていない。そして畳語の構造を以下のように 4 つに分けている。

(8) (i) 名詞を重ねて名詞になるもの
　　例：人びと，山やま，品じな
　(ii) 時の名詞を重ねて副詞になるもの
　　例：時どき，常づね，刻こく
　(iii) 動詞の連用形を重ねて副詞になるもの
　　例：泣きなき，休みやすみ，のびのび，生きいき
　(iv) 形容詞の語幹を重ねて副詞になるもの
　　例：ひろびろ，たかだか，ちかぢか

上の(8i)は，英語のような単なる複数を表すのではなく，多数性を表しているという。たとえば，門の前に二人の人がいても「門の前に人びとがいる」とは言わない。また，この畳語形式は，「虫むし」「馬うま」とは言えないように極端に限定されている。即ち「山やま」のような地理，地形に関する名詞や人，時間などに関する名詞のみである。

以上の秋元の説明から名詞の畳語について何が言えるだろうか。まず限られた名詞だけが畳語になるということ，そして「多数性の複数」を表し名詞になるもの，また，時を表す名詞は，「時々」など副詞になるものもあるということである。

2.2.4『日本語学研究事典』（石井　2007: 171）

石井 (2007: 171) の解説によると，「畳語」は語形成としては，同じ語を重ねて一語となったもので，語構造から見ると同じ二つの語基からなる合成語である。複合語とみなされるが，複合語に含めない見方もある。また，接尾辞「しい」を付けた派生語である「物々しい」「重々しい」などは，厳密に畳語ではないが，重綴（じゅうてつ）として，畳語に含める見方もある。同様に，「しくしく」「ざあざあ」のような語根の反復を畳語に含める見方と含めない見方がある。また畳語は，普通，和語だけを扱い，「刻々」のような漢語を含めないという。石井は，主な畳語の形成パターンと構造（意味）を 7 分類している。それらを筆者が分かりやすく以下のようにまとめた。畳語としての意味は本論に関係するので下線を施した。

(9) (i) 名詞 ------- <u>多数性</u>（例：人々，山々，木々，村々，家々，品々）
　(ii) 名詞 ------- <u>時を表す副詞</u>（例：時々，常々，日々，しばしば）
　(iii) 動詞（連用形）---- <u>継続や反復を表す副詞</u>（例：

泣き泣き，休み休み，思い思い）

(iv) 動詞（連用形）---- 様子を表す副詞（例：生き生き，散り散り，のびのび，晴れ晴れ）

(v) ク活用形容詞（語幹）---- 強調を表す副詞 （例：広々，黒々，寒々，近々）

(vi) 副詞 ------- 副詞（例：まだまだ，まずまず）

(vii) 感動詞 ------- 感動詞（例：あらあら，まあまあ）

石井は，さらに，動詞の重複について，古くは「見す見す」「恐る恐る」のように終止形であったが，後に 連用形が一般になったと述べている。また，合成語の品詞は，一般的に後部要素の品詞と一致するが，畳語に限っては一致しないことが多いと指摘している。さらに，擬声語・擬態語は語根を重ねる型で「さらさら」「するする」などラ行音を含むものが多いと説明している。

以上から容易に分かることは，名詞の畳語には，二つの役割があり，一つは 語基が表す名詞が多数あること，即ち「多数性」を示し，もう一つは，副詞として時を表現することである。(9ii) の例の「しばしば」は，語基が「しば」ではあるものの，現代語では，使用されないため，「しばしば」は一つの語基として捉えられるべきであろう。

2.2.5『研究社　日本語教育事典』(2012)

この事典によると，畳語は英語で ‘geminate word’ と訳され，「語の同じ要素が２つ重なってできた合成語のこと」と説明されている。また，畳語が多いのは日本語の特徴であり，名詞や代名詞のみならず，動詞，形容詞，副詞，オノマトペにも多数ある。同じ要素が繰り返されるのが通常であるが，後項が連濁するものもあり，以下のように５分類されているが，意味については何も述べられていない。

(10) (i) 形容詞が重なったもの：「ひろびろ」「こまごま」「ふかぶか」

(ii) 名詞が重なったもの:「ひとびと」「われわれ」「くにぐに」

(iii) 動詞が重なったもの:「かえすがえす」「ゆっくゆく」「知らず知らず」「泣く泣く」

(iv) 副詞が重なったもの：「またまた」「まずまず」「もっともっと」

(v) オノマトペ：「ずきずき」「さらさら」「ぺこぺこ」「ずるずる」「だらだら」

次に，畳語の表記の方法に言及している。繰り返しを表す「踊り字」と呼ばれる記号があり，それらは，「々」(同の字点：同一の漢字を重ねる場合)と「ゝ / ゞ」（一の字点）である。同一の漢字を重ねる場合には「人々」のように「々」が使われることもあるが，二文字以上の場合は，「一人一人」のように表記され，踊り字は使われない。「ゝ / ゞ」は，現代表記では用いられていないが，平仮名を重ねる場合に使われていた。また，畳語に準じる「準畳語」は，同じではないが対応のある２つの要素が重なる合成語であり，「根掘り葉堀り」「あの手この手」「むちゃくちゃ」「良し悪し」などの例があげられている。

以上から明らかであるが，この事典では，品詞の分類による例が挙げられているものの，意味に関しての記述がない。ただ，名詞について言えることは，「ひとびと」「くにぐに」などの例を選んでいるので，畳語になると，いわゆる「複数」になると暗に示しているのではないだろうか。

2.3『国語学辞典』『国語学大辞典』『日本語学大辞典』

３冊の辞典『国語学辞典』『国語学大辞典』『日本語学大辞典』は名称が少し違うが，すべて日本語学会（旧国語学会）が編集を行っている。最初に 1955 年『国語学辞典』を刊行し，1980 年には，『国語学大辞典』，また，それが 40 年振りに改定され『日本語学大辞典』(2018) として刊行された。日本語学会のホームページによると，「中項目主義」に徹底したため，見出し項目が最初の『国語学辞典』では 2270項目と多かったのが，『国語学大辞典』で 1217項目，『日本語学大辞典』では 797項目と減らされている。[3]　以下，３冊を年代順にみていく。

2.3.1『国語学辞典』

『国語学辞典 第 11 版』(阪倉 1964: 527) は，「畳

語」を以下のように説明している。少々長いが，本論に関連するので省略せずに示す。

［畳語］複合語のうち特に同語の結合から成る場合を言う。体言の重複（人々・わざわざ）・動詞の連用形又は終止形の重複（泣き泣き・行く行く）・形容詞の語幹・連用形・終止形の重複（ちかぢか・よくよく・よしよし）・副詞の重複（またまた）・感動言の重複（いでいで）・いわゆる語根の重複（ほのぼの）・連語の重複（知らず知らず）などの種類があり，意味を強め又は深めて，ものの集る形・形状の大きいこと・事ごとにそうであること・動作の反復・継続などを表わして，副詞的に用いられることが多い。「たわわに」「よわよわし」のように，語幹要素の一部又は全部を反復する重綴法もこれに含めて考えることができる。動詞を重ねる場合，古くはその終止形をもってし，後には連用形をもってすることが一般的になった。「子供子供する」のような構成法は現在も生産的である。畳語は複合語中最も素朴なものに属し，擬声語・擬態語を始め，未開人の言語や幼児語また女房語などに，しばしば見られる構成法である。

上の記述から，意味については，強調や形状などが書かれているが，どの品詞の畳語にどの意味が表現されるかについて述べられていない。しかし名詞に関して，注目すべき点がある。それは，生産的用法である「子供子供する」の構成法について指摘していることである。[4]　名詞の畳語というと，どうしても「複数」を表すということが前提になるため，辞典でこの意味について述べられることが極めて少ない。

2.3.2 『国語学大辞典』

次に刊行された『国語学大辞典　第四版』（1984）では，「畳語」の扱いがかなり違うことが分かる。まず，見出し項目を減らしたからであろうか，そもそも「畳語」が見出し項目となっていない。その代わり別の４項目の一部に見出される。項目と「畳語」に関する部分のみを取り出してまとめると以下のようになる。

(11) (i)「疑問詞」--- はっきり指定せずにある種のものごとの代用に用いる。
　例：「田中なにがしが，いついつどこそこで誰々に会って何々を受けとったとかいう噂だ。」
　(ii)「くり返し」---「人々」「次々」「重ね重ね」などのように，それが複合語となって複数・反復・強意など表すものを畳語という。
　例：「昔々の大昔」「待ちに待った」（意味を強める）
　　「人々」「土地土地」（複数を表す）
　(iii)「形態論」---「畳語」は，形態素の全部あるいは一部を繰り返すことによって派生や屈折を起こす場合をいい，内部変化を伴うこともある。
　例：ギリシャ語 /léip-o/（「私は去る」現在形）
　　/lé-loip-a/（同上 完了形）
　　（語基の /léip/ が /loip/ と内部変化して反復し屈折している。）
　(iv)「和語」---「和語の語構成」は性質に基づき「単一語」「転成語」「派生語」「畳語」「合成語」に 5分類されている。「畳語」は同語基が反復するもの。
　例：「人々」「色々」「ありあり」「まるまる」「しずしず」「かんかん」
　　反復して派生している例：「軽々しい」

上の説明からでは，日本語の名詞が畳語形になると，「複数」のみを意味するということになる。

2.3.3『日本語学大辞典』

興味深いことに，『日本語学大辞典』（蜂矢，2018：511）では，「畳語」の項目が設けられ，蜂矢は，万葉集からの例を引用しながら概説している。[5]現代語ではなく，古代語の畳語を扱っていることに留意するべきだが，まず，その要旨を紹介する。蜂矢は，畳語を「２つの単語ないし語構成要素からなる複合語のうち前項と後項が同一のものであり，１

つの単語ないし語構成要素を重複したものを言う」と定義している。さらに重複される単語ないし語構成要素を「重複素」と呼び，名詞，動詞終止形・連用形，またク活用形容詞語幹など独立的でない語構成要素などがあると述べている。以下は，蜂矢の提示する意味と用例をまとめたものである。

(12) (i) 名詞　「枚挙（.. ごとに）」：例「夕々（ヨヒヨヒ）に我が立ち待つに…」（万葉集 2929）
「総数」：例「国々の防人集（さきもりつど）ひ…」（万葉集 4381）
(ii) 動詞終止形・連用形「反復」：例「…海原はかまめ立ち立（た）ち…」（万葉集 2）
「継続」：例「世間の繁き仮廬に住み住みて…」（万葉集 3850）
(iii) ク活用形容詞語幹（ニ・トを伴い（または伴わず）情態副詞として）
「情態」：例「…高々（たかたか）に待（ま）つらむ君（きみ）や…」（万葉集 3692）
「擬音語・擬態語」：例「…しはぶかひ鼻びしびしに…」（万葉集 1892）

蜂矢はこれら 3 種の意味を対比した上で，共通の要素を以下のように提示している（蜂矢，2018 : 511）。

> これらは，枚挙 ― 総数 ― 情態，反復 ― 継続 ― 情態のように連続的である。また，枚挙と反復，総数と継続は対応するととらえられる。①はモノの複数，②はコトの複数，③は比喩的な表現ながらサマの複数を表すと見て，全体は，複数を表すものとして統一的にとらえられる。

上の①②③はそれぞれ，名詞，動詞，形容詞における畳語を指している。以上のような意味に共通するのは，「複数」であると蜂矢は主張している。その上で，「アヤニアヤニ（万葉集 3497）」[6] のような重複素が副詞などのものは，重複により強調するものと見られ，複合語と見るよりは２語の並列と見るのがよい」と述べている。蜂矢（2014）では，この副詞だけでなく，助詞・接尾辞を伴った重複，動詞命令形の重複，形容詞連用形の重複も強調を表すと考えている。換言すれば，蜂矢の考えは，畳語の意味の根底にあるのは，「複数」であり，「強調」を表現するのであれば，畳語としてではなく，同じ語が並んだと捉えるべきであるというものである。意味の強調が生じる場合は，２語が複合されず，独立したままであるとみなされる。

以上の蜂矢の主張から，古代語では，名詞の畳語は「枚挙」と「総数」を表すことになるが，「枚挙（.. ごとに）」は副詞的用法であるのかどうか，また「総数」は多数を表すとしても，「複数」とどのように違うのかについての説明がない。ただ，蜂矢は，畳語の意味の基本は，「複数」であると論じているので，「枚挙」と「総数(多数)」の上位に「複数」があると考えることもできる。上の例 (12i) の「夕々（ヨヒヨヒ）」は，『旺文社全訳古語辞典　第四版』(2014) では，「よひよひ [宵宵]」と異なる漢字が当てられ，意味は「宵ごと，毎夜」とある。しかし，『新全訳古語辞典』(2016) は，「よひよひ [宵宵]」であるが，意味は「多くの宵。宵ごと」とあり，「枚挙」だけでなく，「多数」も表現していることから，「総数（多数）」と「枚挙」の二つの意味が表現され得るのである。従って，「夕々（ヨヒヨヒ）」は「複数」を表すと定義することが可能になる。

2.4 まとめ

2.1 では一般的な辞典をみたが，定義としては複合語で，名詞の意味については「複数」だけが示されていた。2.2 で，語学専門書・辞典を調べると，複合語とは区別して合成語の一種とされる場合もあった。また名詞に限っての意味は，「複数」だけでなく，「多数」の要素が含まれる「多数性の複数」も示された。「個としての連続」とも説明されているが，意味が不明確であった。また，畳語が時を表す副詞になる点も指摘されていた。2.3 は，日本語学会が編集した３冊の辞典を時代ごとに追ってみた。最初の辞典には，生産的用法として「XX する」という構成法に触れていた。２番目の辞典では，「畳語」の項目がなく，３番目は古代語の畳語について

記述されていた。名詞の畳語の意味に関しては,「枚挙（.. ごとに)」と「総数」があげられていた。

以上から，辞典などを参考にすると，名詞の畳語の意味は,「複数」が典型的であると考えられる可能性が高い。多くの辞典などでは,名詞の畳語は「複数」を表現することが示されている一方で，時を表す副詞,「枚挙（.. ごとに)」の意味,「多数性」，さらに生産性のある「XX する」という用法についてはあまり書かれていないことが今回の調査で明らかになった。

3. 名詞の畳語に関する意味研究

畳語の中でも，基語が名詞である畳語についての論文を以下で検討する。3.1では，國廣 (1980) と関連研究, 3.2では, 唐須(1992), 3.3では，飯間(2003), 3.4 では，小野 (2015) と徐 (2016) を取り上げる。最後に，3.5 でまとめを述べる。

3.1 國廣 (1980) と関連研究

國廣 (1980: 13-14) は，簡潔に日本語の名詞の畳語について論じている。「山山，家家，人人」のように名詞を重ねるのは和語が多く，國廣はそれらを「畳語複数」と呼んでいる。國廣の結論を先に述べると，名詞の畳語は,〈個別性を保った不特定多数〉を意味するということである。

まず，英語と比較し，日本語は名詞一つで複数性を表すことができるため，畳語は複数以外の意味が加えられているはずであると考えている。また，英語の 'three houses' を「三軒の家」と言えるが,「*三軒の家家」とは言えないことを指摘する。しかし，三軒のように特定の数でなく「 通りに沿った家々」('the houses along the street') や「十数人の人々」のように漠然とした数詞では言えることから，畳語形は〈不特定多数〉を表すと提言している。さらに，それだけではなく，國廣は，畳語は個体の〈個別性〉(individuality) が高く意識されていると主張している。その上で，さらに〈少しづつ異なっている〉(various) も含意されているという。國廣が次の例を挙げ，これらの特色が文脈の表現に反映されていると述べている。

(13) (i) 急ごしらえの棚や台の上に，所せましと並べられた色も形もとりどりの品々。
(ii) 視線をずっと手前にずらして来ると, スヴァの町の屋根屋根が並んでいる。もう，わらぶきは見られず, 色とりどりの近代建築だ。

さらに,〈個別性〉は，以下の例のように，文脈によっては,〈毎…〉(every) の意味を帯びるという。

(14) (i) …まだ，人気のない薄明に，沼のへりを，ひょこり, ひょこりと歩きながら餌をあさっている孤独な姿を，冬は朝々に見かけた。
(ii) 毎年，季節が変る度に，抽出しの中を掻き廻して，季節々々に向いた靴下を取り出して整理する。

ところで，國廣 (1980: 14-15) は，複数を表す接辞についても論じている。まず,「たち・ら・ども・がた」があり，基本的に人のみに用いられるものである。「ども」は蔑称,「がた」は敬称を含意している。さらに，接頭辞の「諸ー」と畳語形を比較し，違いについて興味深い観察をしている。以下のように造語法では相補分布を示しているという。

(15) (i)　言語教育の諸問題を論じる。
(ii) * 言語教育の問題問題を論じる。
(16) (i) * 森の諸木（しょき）
(ii)　森の木々

上から分かることは,「諸−」は漢語のみと結び付くが，畳語形は，和語が語基で繰り返されることである。また意味の差もあるという。「諸−」は,〈全体をひとまとめにとらえる〉を表すという。「諸−」と畳語複数は，種類が〈いろいろ〉であることを含意している共通点があるが, 畳語複数は〈個別性〉を含み,「諸−」は〈ひとまとめ〉を含む点が異なっている。例えば「南洋の島島」は,〈不特定多数〉の島であるのに対し,「南洋諸島」は，ある限定された島の群を〈ひとまとめ〉にして表現している。

三浦（1998）は，國廣が提言する個別性につい

てより深く検討している。「庭一面に花が咲いている」では，一種類の花が複数存在しているが，「庭一面に花々が咲いている」というと，多種類で複数の花が咲いていることを示すと考えられる。従って，畳語名詞の特性を，〈異種，個別的不特定多数〉と提案している。さらに三浦はこの意味特性を説明するために，山梨 (1995：126-127) の複数認知を示す二分法（「総合的スキーマ」「離散的スキーマ」）のイメージスキーマを基にして，新しいスキーマ（中間態スキーマ）を想定している（三浦 1998: 55）。

梅林 (2005) は，國廣に提示された畳語の意味（〈個別性を保った不特定多数〉）に沿って，「歌々」を扱っている。この畳語形は，一般的ではないのだが，日本語日本文学の分野で少なからず用いられている。専門用語と考えることもできるが，梅林は，このような特殊な用法が，なぜ専門分野では可能になるのかについて考察している。最初に，実例としてあげられているのが，和歌を五首引用した後で，「これらの歌々では」という表現である。一般的には，違和感を感じるのではないかと述べ，その理由は，「五首」が不特定でなく多数でもないからであると説明している。さらに，他の用例には，次のようなものがある（梅林 2005: 39-49）。

(17) (i)「…1300 年以上ものはるかな昔に生まれた歌々から…。」
(ii)（万葉集の巻十について）「作者の名を伝えない庶民の歌々です。」
(iii)「百人一首の歌々は…」
(iv)「『一握の砂』の歌々，…」

上の表現が許されるのは，専門家が 不特定多数性と個別性を見極められる専門的能力があることに起因すると梅林は捉えている。つまり，専門家は，数十首の万葉集歌を不特定多数としてだけでなく，各歌に独立した個別性を感知する。同時に各歌を春の歌，秋の歌，読み人知らずなどと識別する能力を有している。このような専門家は，「歌々」は，まさに國廣の提言する〈個別性を保った不特定多数〉として捉えるのであるが，非専門家にとって，不特定多数と捉えることができても，個別性を考慮に入れることができない。その理由から一般的には，「歌々」という畳語形が受け入れられないだろうと梅林は推測している。

3.2 唐須 (1992)

唐須 (1992) は，日本語の畳語の中で，何故名詞（体言）の畳語が何故少ないのかについて論じている。まず，唐須は，畳語を次の三つのグループに分けている。

(18) (i) 体言として使われるもの（例：人々，木々，島々，家々）
(ii) 形容詞として使われるもの（例：物々しい，馴れ馴れしい，いまいましい）
(iii) 副詞として使われるもの（例：寒々，常々，時々，内々）

この中で，体言として使われる語は極めて数が少なく，いわば閉じられた集合をなすが，他の２つに属する畳語は多数あり開かれた集合をなしていると捉えている。そこで，体言として使われる畳語が何故閉じられた集合であるか，何故生産性がないのだろうか，つまりもし畳語が単なる複数を表現する手段であるなら，なぜ多くの語に適用されないのかという疑問を考察している。具体的には，何故山々と言えるのに，丘々と言えないのか，また人々といえるのに，なぜ犬々と言えないのかという理由を検討している。

まず，体言を表す畳語に共通する点をあげている。第一に音声特徴は，二音節以下であり，第二に，意味特徴は通常集団で存在するもので，「人々」以外は，無生物である。第三に，この畳語すべての語種は和語である。これらの特徴が非生産性に重要な役割を果たしていると唐須は考えている。

しかしなぜ「人々」と言えるのに，「犬々」「猫々」と言えないのかという問いに対して，体言を表す畳語は「通常集団で存在するもの」ではなく，「通常集団で存在すると考えられているもの」（唐須 1992: 129）であるという。つまり，重要なことは，

集団で存在することに意義を認めている点であり，故に「人」は畳語になるが，通常単独で存在すると思われている犬や猫には畳語形がないのである。それでは，馬や牛などは２音節であり，集団で飼われているのになぜ畳語形がないのであろうか。これを説明するために，唐須は次の仮説を立てている：「体言としての畳語で表される物は全て古代日本に於て何らかの信仰の対象になったものではないかということである」（唐須 1992: 130). 山岳信仰などから自然への畏怖の念があり，特に，山々，峰々，岩々などが言えるのは，自然の特に大きいものや高いものに対しての畏怖の念があるからだという。家々，村々，町々など人工物に対する畳語もこの延長線上にあり，家には神棚，村や町には，守護神社があり，神々の住むところだと意識されていた。

体言としての畳語は，古代日本で信仰の対象となり，通常集団で存在していたものである。その意味で，形容詞や副詞としての畳語とはかなり異なっている。また，このような畳語になる名詞は，次から次へと生まれるはずはなく，閉じられた集合である。さらに，これらの畳語は通常の複数ではく，英語の ‘royal we’ に似た機能があるのではないかと推測している。‘Royal we’ というのは，‘I’ による自己同定を避けるために，代わりに複数形の ‘we’ を用いることである。同様に，信仰の対象としての体言の畳語も個別化を避けることになると唐須は述べている。

3.3 飯間 (2003)

飯間 (2003: 31-36) は，なぜ「猫々」が言えないかについて述べている。まず，飯間は，日本語で文法的に単数と複数を区別しないが，人や動物には「たち」「ども」「ら」などを付加し「私たち」「ペットたち」と言うこともできる。しかしそれは義務的ではなく，「何人もの女をだました」でも「何人もの女たちをだました」でも構わない。飯間は，「たち」をつけるより，もっと一般的な形は，名詞を繰り返す畳語形であると述べている。「人々」「木々」「山々」「折々」のように，人間，植物，風景，抽象物などに畳語があるが，「猫々」とは言えず，対象となる名詞に偏りがあると指摘している。その理由は，簡単に言うと畳語形が単に複数ではなくグループを構成する一つ一つのものを独立的に捉えるからだという。國廣に従うと「個別性を保った不特定多数」を表すと考えられる。そこで，「山々」は，見渡される連山の中で高い山や低い山があるという変化に富んだ山一つ一つを指すのであり，川の場合は，そのように見渡せないので，「川々」とは言えないと説明している。従って，「人々」は，色々な人を指し，いい人，悪い人，富んだ人，貧しい人，など個性のある一人一人を示す。一方で猫や犬や鳩は，多数集まっても一つの集団として捉えられ一匹一匹，一羽一羽，個性が認められないため，「* 猫々」「* 犬々」「* 鳩々」とは言えないのであろうと述べている。

飯間 (2003: 34-35) は多くの名詞を調査するためにインターネットの電子図書館「青空文庫」から 500 の作品を選び，畳語形の名詞を抽出した。その結果，81種の畳語形が見つかった。使用頻度の高い上位 20 位までが以下のように示されている。

(19) 1. 人々　2. 我々（吾々）　3. 時々　4. 種々
5. 色々　6. 方々（かたがた・ほうぼう）
7. 所々（処々）　8. 度々　9. 折々　10. 日々
11. 家々　12. 様々　13. 数々　14. 山々
15. 口々　16. 橙（だいだい・よよ）
17. 町々（街々）　18. 木々　19. 年々　20. 月々

上の例は常識的なものである。しかし，少数ではあるが，次のような畳語もあるという。

(20)「朝々」「穴々」「駅々」「丘々」「親々」「組々」「件々」「崎々」「谷々」「藩々」「店々」「宿々」「夜々」「教室々々」「職務々々」

上のような普通とは思えない畳語も以下のように文章の中では自然に使われていると述べている。

(21) (i)「そしてそれらの穴々が，いつかの間にか次々に塗り固められて行っているのを見た。」（島木健作「ジガ蜂」）

(ii)「朝夕の霧の中から浮び上る丘々や，その上に屹然(きつぜん)として聳える古城郭から，」
（中島敦「光と風と夢」）

(iii)「音吉が独り残って教室々々を掃除する音は余計に周囲(まわり)をヒッソリさせた。」
（島崎藤村「岩石の間」）

上の例の「教室々々」は，いくつもの教室を表すのではなく，順に掃除する一つ一つの教室を独立的に捉えていると説明している。従って，飯間は「猫々」もそれぞれの猫が独立的に捉えられる状況があれば，言えないことはないだろうと次の文を作成している。

(22) ある動物病院に，今日はいったいどうしたわけか，病気の猫ばかり次々につれて来られます。一匹の猫の治療が済んだら，すぐまた次の猫という具合で，とてもさばききれない。獣医師は，食事をとる暇もなく，訪れる猫々に注射をしたり薬を与えたりして，奮闘を続けるのだった‥‥‥。（飯間 2003: 36）

上の「猫々」は，「来る猫来る猫それぞれに」という意味になり，受け入れやすいのではないかと述べている。

以上から，飯間は，「山々」が言えるが「猫々」が言えないというのは，程度の問題であると主張している。「山」は，独立的に一つ一つ捉えて表現することが多いので，畳語形が使いやすい。それに対して，「猫」は，そのようなことがあまりないため，畳語形が使いにくいのであろうと提言している。換言すると，飯間は，どの名詞でも，ある状況下では畳語形が可能であると考えているのではないだろうか。そして，名詞の指し示すものの独立性が顕著な場合は畳語形が自然であるが，そうでない場合は，不自然になりやすいため畳語形を使いにくくなると解釈できる。

3.4　小野 (2015)　徐 (2016)

小野 (2015) は，「XX した／している」を構文的重複語と呼び，形態的・意味的分析を行っている。日本語の重複後は一部を除いてほとんどが語彙化され生産的ではないが，「女の子女の子した女」「このスープ野菜野菜してるね。」「大阪大阪した街並み」のようにこの構文的重複語は生産性が極めて高いと述べている。また，この構文は，この形式以外では用いられないという強い制限もある。Google 検索から得られた様々な例文をデータとして用い，この重複形式は，反復と重複の中間的なものであるだろうと述べている。「女の子女の子した」は，「女の子」という語の中核的な意味の中で多くの人が思いつく属性を表している。また，英語でも次のような重複形式があることが紹介されている：I'll make the tuna salad and you make the SALAD-salad'[7]（大文字は第一強勢が置かれる）「私はツナサラダを作るから，あなたは，本当の（典型的な）サラダを作ってね」。英語の場合は重複語が名詞としての用法のみで，語基名詞のデフォールト，プロトタイプの属性，または拡張された属性を表すと説明されている。

徐 (2016) は，名詞畳語の用法で，擬態的な意味を表すと考えられる表現をコーパスで調査している。「子供子供した…」や「田舎田舎した…」などのように，多くが「‥した（している）」という形で表れる表現について，どのような名詞がどのように使われているのかなどを探っている。例えば「子供子供した小動物」は「いかにも子供のようなかわいらしい小動物」のように一種の「擬態的」な意味になると述べている。コーパスとして，『青空文庫』『新潮文庫』『日本語書きことば均衡コーパス全データ』を利用して，このような畳語形を検索すると，以下のように 17 語と 45 例の名詞畳語用法のデータが見つけられた。

	青空文庫	新潮文庫	均衡コーパス
子供子供	15	4	3
小供小供	1		
子ども子ども	1		
女の子女の子			2
むすめむすめ	1		
少女少女			1
坊ちゃん坊ちゃん	1		
おばあちゃんおばあちゃん			1
年寄り年寄り			1
素人素人	1		1
百姓百姓	1		
教祖教祖			1
悪魔悪魔		1	
田舎田舎	2		
接続詞接続詞			3
小説小説		1	
病気病気	1		
元気元気	1		
丈夫丈夫	1		
	26	6	13

表 1: 日本語の名詞が畳語の形で擬態的な意味を表すデータ表（徐 2016: 154）

表 1 から分かるのは，「子供子供」が全用例の 53% を占め，さらに表記法が異なる「小供小供」「子ども子ども」も各 1 例ある。他は「女の子」「娘」「少女」「坊ちゃん」「おばあちゃん」「年寄り」があり，人の年齢や身分と関連がある。また，「素人」「百姓」「教祖」「悪魔」も人物の特徴と関係ある語であり，この種の名詞は全体の65％になるという。残りは，特殊性を帯びた「田舎」「接続詞」「小説」や，形容動詞の語幹である体言形式の「病気」「元気」「丈夫」である。以下にその内 3 例を選び，畳語部分に下線を施した（徐 2016 : 155)。

(23) (i) 2 人のナナが居ます。1 人はバンドをやっているからかっこいい女の子で，もう 1 人は女の子女の子した感じの優しい子で…
（Yahoo! 知恵袋）

(ii)「あんた，悪魔だろう。もっと，この，いかにも悪魔悪魔した武器はないのかね」
（『ブンとフン』）

(iii) 傍線が接続詞と接続助詞であるが，目立った特徴は，「いかにも接続詞接続詞した」接続詞（たとえば「しかし」「そして」「すると」「それで」「だから」「どころが」など）の見当たらないことだろう。（『私家版日本語文法』）

徐 (2016: 156) は，名詞の畳語形は複数の意味を表すのが一般的であるので，このような擬態的な意味になるのは，まれな現象だと述べて，このような用法を「擬擬態語」と呼び，「擬音語・擬態語」の影響を受けて生じた言語現象だと主張している。このように擬態的な意味を表す名詞畳語形の用例は決して多い訳ではなく，近代小説の作品に集中して見られたが，2005年の小説でも使われている。また用例で「子供」が語基になっている例に偏っているようにみえ，生産性がそう高くはないと思われるが，上の例にもあるように「いかにも～」という副詞を伴うと生産性があるようだと述べている。

3.5　まとめ

3.1-3.5 まで，基語が名詞である畳語について，國廣 (1980) と関連研究，次に，唐須 (1992)，飯間 (2003)，最後に，小野 (2015) と徐 (2016) を概観した。國廣 (1980) は，名詞の畳語は，〈個別性を保った不特定多数〉を意味すると提言している。言い換えると，〈個別性〉が意識され，〈すこしづつ異なっている〉ことが暗示されているという。〈個別性〉は文脈によっては，〈毎…〉の意味も帯びる。

唐須 (1992) は，体言（名詞）の畳語が極めて少ない理由を説明するために，古代日本で信仰の対象であったものが畳語になったという仮説を立てている。また，日本語の畳語は単なる複数ではなく，英語の ‘royal we’ のように，個別化を避けることになると推測している。従って，個別性にかんして，唐須の考えは 國廣の主張とは全く対立している。

飯間 (2003) は，何故「猫々」が言えないかというと，畳語形はグループを構成する一つ一つを独立

的に捉えるからであると述べ，基本的に國廣の提唱する〈個別性を保った不特定多数〉を表すと考えている。飯間は文学データを調査した結果から，一般的でない畳語も使われていたことに気づき，名詞が指し示すものの独立性が顕著な場合は，畳語が自然であり，文脈によっては「猫々」も受け入られるだろうと述べている。

小野 (2015)と徐 (2016)は，生産性が高い「XX した／している」という構文を検討している。小野は，Google 検索から得られたデータに基づき，この重複形式は，反復と重複の中間的なもので，意味は，語基の中核的な意味の中で多くの人が思いつく属性を表していると述べている。徐 (2016) は，主に文学のコーパスで調査した結果，「子供子供」が全用例の半分以上を占め，他は「女の子」「坊ちゃん」「年寄り」など年齢や身分と関係があると述べている。

4. 考察

前節で概観した先行研究の中で，國廣 (1980) による〈個別性を保った不特定多数〉が最も説得力のある説明であると思われる。個別性が意識されているということは，それぞれが異なるということである。國廣の提示した意味をもう一度よく考えてみよう。筆者は，〈個別性を保った不特定多数〉の基底には，〈個別性〉と〈多数性〉という必須の二要素が絡み合っていると考える。この要素のどちらかにより意識が向けられた場合，もう一つの要素に対する意識が低下すると仮定する。例えば，〈個別性〉は文脈によっては，〈毎…〉の意味も帯びると言っているが，この場合は，〈個別性〉に焦点が当たり，〈多数性〉が背後に退いたと想像できるだろう。また，〈多数性〉に焦点が向けられると，〈個別性〉に対する意識が低下し，多数であることを表すようになる。(1ii) で紹介した「水面下で ひとひとで移しているのではないか…」の「ひとひと」は，「人々（ひとびと）」と発音が違う。発音が違うということは意味も違うはずである。この文脈での「ひとひと」は，〈個別性〉に焦点が当たり〈多数性〉が弱まっていると想像できる。その結果，「個別の人」と「（多数でなく）二人」の意味を表現していると考えることができる。それに対して「人々（ひとびと）」は，個別に人がいると意識されるよりも，多数の人がいるという意識の方が高く，故に〈多数性〉に焦点が向けられて，〈個別性〉が影になっていると考えられる。

また，飯間 (2003) が「山々」は言えるが「猫々」が言えないというのは，程度の問題であるという指摘は注目すべきである。飯間によると，どの名詞でも，名詞の指し示すものの独立性が顕著な状況下では畳語形が自然になると考えられるのである。飯間は言及していないが，「地球」「月」「太陽」など世の中に一つしかないものでも適切な状況を想像すると畳語形が可能になるのではないだろうか。例えば，ある人が見た夢を次のように語るとしよう：「不思議なことに宇宙空間には，多くの地球があり輝いていた。私はそれらがどのような地球なのか知りたいと思った。…私が宇宙船で旅する地球々々は…」この発話の中の畳語「地球々々」を「それぞれの地球」という意味で使用することは可能であると思われる。しかし同時に不自然な感じもする。それは多分，多くの地球があるとしても，我々が住む地球に形が似て同じような球体が宇宙に浮かんでいると思えるからであろう。つまり，「一見して異なっていることが明らか」なモノであることの方が畳語形として受け入れられる可能性が高いと考えられる。例えば，地球 1 地球 2 地球 3 … . と多数の地球があり，それぞれ大きさや，色が異なり，宇宙空間で違いが分かる惑星として複数あれば，「地球々々」という表現がより自然に感じられるだろう。次の文のように複数の地球が同一に見える場合，畳語にすると不自然であると思われる。

(24) 不思議なことに宇宙空間には，多くの地球があり輝いていた。私はそれらがどのような地球なのか知りたいと思った。… ？私が宇宙船で旅した地球々々は，皆全く同じだった。

それに対して，次のように，複数の地球が同じでなく，大きさや大気圏の色など異なっている地球が見えた場合，畳語を用いてもある程度自然ではないだろうか。

(25) 不思議なことに宇宙空間には，多くの地球があり輝いていた。私はそれらがどのような地球なのか知りたいと思った。…私が宇宙船で旅した地球々々は，それぞれ個性的で魅力的な自然と人間で満ち溢れていた。

最後に，小野 (2015) と徐 (2016) が検討した「XX した／している」は，生産的であり，名詞の畳語の用法として一般に知られるべきだと思われる。小野は，この形式は，反復と重複の中間的なものだろうと述べてはいるが，反復との関係性についてさらに論じられるべきである。また，この研究に関しては，今後，口語のデータからの分析が必要だと思われる。

5. 結論

本稿は，現代日本語の畳語を取り上げ，特に名詞を語基にした畳語の意味を検討した。畳語の表現する意味について先行研究を参考にして，中核的な意味を特定することを試みた。２節は畳語の定義と用法を 辞典などを参考に調査した結果，名詞の畳語の典型的な意味は「複数」であることがわかった。３節では，名詞の畳語の意味について先行研究を概観した。國廣 (1980) と関連研究，唐須 (1992)，飯間 (2003), 小野 (2015) と徐 (2016) の順に概観した。４節では，先行研究の中で最も説得力のある國廣 (1980) の〈個別性を保った不特定多数〉の基底には〈個別性〉と〈多数性〉という必須の二要素が絡み合っていると考え，どちらかの要素により意識が向けられた場合，もう一つの要素に対する意識が低下すると仮定した。例えば,「ひとひと」は〈個別性〉により意識が向けられるため,〈多数性〉が低められることになり「二人」を表す可能性がある。一方で「ひとびと」は〈多数性〉により意識が向けられているため,「二人」を示すことはないと考えた。また，どの名詞でも独立性が顕著な状況下では，その畳語形が受け入られやすいという飯間 (2003) の考えは注目すべきであると指摘した。

注

1) 分かりやすくするために著者が意味の部分に下線を施した。
2) この分類は，玉村 (1988: 24) とほぼ同じである。玉村は，複合語を「純複合語」と「準複合語」に分け，さらに「純複合語」を「並列複合語」（例：やまかわ）と「統語複合語」（例：やまがわ）に分けている。「準複合語」の例は,「きのこ」「食わず嫌い」などである。
3)「特設ページ：『日本語学大辞典』40年ぶりに改訂・刊行」<https://www.jpling.gr.jp/gaiyo/syuppan/daiziten_tokusetu/> を参照した。
4) 阪倉 (1973: 348) は，名詞の畳語にかんして，しばしば事物を集合的に捉えて共通する属性を抽象して，その属性を代表的に示す事態を意味し，助詞の「ーに」を伴って，副詞的に用いられると論じている。また「男々し」「女々し」のように接尾語「ーし」を伴い形容詞を構成するだけでなく，現代語では「する」と複合して「坊ちゃん坊ちゃんする」などのように動詞を構成する力を保持していると述べている。（「男々し」は「雄々し」のことだと考えて良いと思われる。）
5) 蜂矢は，佐藤・前田（監修）『日本語大事典』(2014) でも「畳語」の項を担当執筆している。説明内容については『日本語学大辞典』と概ね同じである。
6)『旺文社全訳古語辞典　第四版』によると,「あやに」は,「言いようもなく。わけもなく。むしょうに」の意。
7) この例文は Ghomeishi et al. ‘Contrastive focus reduplication in English’ (2004: 311) (In *Natural Language and Linguistic Theory* 22: 307-357) からのものである。

参考文献

秋元美晴　2002.『よくわかる語彙』 アルク, 東京 .
飯間浩明　2003. 『遊ぶ日本語　不思議な日本語』（岩波アクティブ新書　75），岩波書店，東京 .
梅林博人　2005.「畳語形の使用について --「歌々」を例にして」『成城文芸』192: 37-47.

沖森卓也（他） 2008.『図解日本語』三省堂，東京.
小野尚之 2015.「構文的重複語形成—『女の子女の子した女』めぐって—」由本陽子・小野尚之（編）『語彙意味論の新たな可能性を探って』463-389， 開拓社.
國廣哲彌 1980.「総説」 國廣哲彌（編）『日英語比較講座 第 2 巻 文法』 大修館書店， 1-22.
阪倉篤義 1973.『語構成の研究』（第3版）角川書店，東京.
徐 一平 2016.「日本語の名詞が畳語の形で擬態的な意味を表す問題について—コーパスの役割も同時に考える—」『日本語・日本学研究 / 東京外国語大学国際日本研究センター [編] (Journal for Japanese studies) 』 6: 153 -162.
玉村文郎 1988.「複合語の意味」『日本語学』7.5 :23-32.
唐須教光 1992.「言語学的説明再考ー日本語の畳語を例として」『慶應義塾大学藝文学会』60: 123 – 135. (312-324)
三浦秀松 1998.「数についての一考察 : 畳語をめぐって」 Core 27: 43-60.
山梨正明 1995.『認知文法論』ひつじ書房，東京.
Kiyomi, Setsuko. 1995. A new approach to reduplication: a semantic study of noun and verb reduplication in the Malayo-Polynesian languages. *Linguistics* 33: 1145-1167.

辞典

荒木一郎（編）1999. 『英語学用語辞典』 三省堂.
石井正彦 2007. 「畳語」 飛田良文・遠藤好英（他）（編）『日本語学研究事典』 明治書院，171.
国語学会（編） 1984.『国語学大辞典 第 四 版 』東京堂出版 .
近藤安月子・小森和子（編）2012.『研究社 日本語教育事典』 研究社 .
近藤泰弘 2014.「畳語」『日本大百科全書（ニッポニカ）』（電子版） 小学館.
阪倉篤義 1964.「畳語」『国語学辞典』 国語学会（編） 東京堂出版，527. 角川書店，東京.
佐藤武義・前田富祺（監修） 2014. 『日本語大事典』 朝倉書店.
小学館国語辞典編集部（編）2008.『小学館精選版日本国語辞典』（電子版） 小学館.
長屋尚典 2015.「重複」 斎藤純男・田口 善久・西村 義樹（編）『明解言語学辞典』 三省堂，155.
新村出（編） 2018.『広辞苑 第七版』（電子版）岩波書店 .
蜂矢真郷 2014.「畳語」佐藤・前田（監修）『日本語大事典』朝倉書店，1060-1061.
蜂矢真郷 2018.「畳語」日本語学会（編）『日本語学大辞典』東京堂出版，511.
林巨樹・安藤千鶴子（編）2016.『新全訳古語辞典』 大修館書店 .
宮腰賢・石井正己・小田勝（編）2014.『旺文社全訳古語辞典 第 四 版』 旺文社.